世羅のコタカチルドレン
—大妻コタカ　ふるさと世羅町での女子教育への貢献—

Kotaka Children in Sera
—In Sera Town, Otsuma Kotaka's hometown　contribution to girls' education—

髙垣 佐和子[1], 井上 小百合[2], 井上 俊也[3]
Sawako Takagaki[1], Sayuri Inoue[2], and Toshiya Inoue[3]

[1]大妻女子大学博物館大妻コタカ・大妻良馬研究所,
[2]一般財団法人大妻コタカ記念会，[3]大妻女子大学キャリア教育センター

キーワード：大妻コタカ，建学の精神，オーラル・ヒストリー
Key words：Kotaka Otsuma, Founding spirit, Oral history

１．研究目的

私学である大妻学院では，建学の精神にのっとった学校運営が求められており，建学者である大妻コタカについては既に多くの研究がなされている．

建学して 110 年以上が経つ大妻学院では，その建学の精神を引き継ぐためには大妻コタカ自身の思想・活動だけではなく，大妻コタカの教えを受けた人々である所謂コタカチルドレンが建学の精神をどのように発揮したか，その思想・活動についての研究をすることが必要である．

本研究は，昭和 27 年に広島県世羅郡甲山町（現世羅町）で，町立として創設された甲山高等技芸学校（後の学校組合立大妻女子専門学校）に注視した．

大妻コタカは，この甲山高等技芸学校で校長を務め，戦後に故郷の甲山町で第二の建学をなしたと言える．

広島県世羅郡甲山町で大妻コタカの学びを修めた者を「世羅のコタカチルドレン」と定義し，「世羅のコタカチルドレン」が大妻精神をどのように継承し具現し展開したかについて聞き取り調査を行い，大妻コタカの世羅町での女子教育の貢献を明らかにすることを目的とする．

２．研究実施内容

2.1　資料調査

大妻コタカの第二の建学の機会となった町立甲山高等技芸学校（後の学校組合立大妻女子専門学校）の成り立ち，その位置づけを，創設前後である昭和 20 年から新校舎建築の昭和 34 年を中心に，日本経済，社会動向について文献や資料を調査した．

以下に概要を「甲山高等技芸学校の成り立ち」として記す．

2.1.1 甲山高等技芸学校の成り立ち

（1）甲山町立甲山高等芸学校の創設の原点

甲山町立甲山高等技芸学校は，第二次世界大戦の敗戦を引きずり，国力が低下し，衣食にもまだ事欠く貧しい状況下の昭和 27 年 4 月に，町立として創設された．

昭和 27 年という戦後の復興期に，当時甲山町長であった兼広清一は，祖国の復興を教育と文化によって実現させることを重要な施策の一つとし，農村子女の婦徳涵養を目的とした町立の女子の学校を設置することを考えた．

兼広清一町長の発意は，町議会・町教育委員会・その他有志を動かし，未婚の子女を親の手許で育みながら教養を身に付けさせることを戦後復興の施策の一つとしたのである．

これが甲山町立甲山高等技芸学校の創設の原点であった．

（2）戦後の学制改革

昭和 20 年 8 月 15 日，敗戦によって日本は戦勝国アメリカによる間接統治時代となった．昭和 26 年のサンフランシスコ平和条約により日本が独立をするまでの期間，国政はすべて占領行政のもとに行なわれた．

学制改革はこの期間に行われ，新しい立法により昭和 22 年に「教育基本法」が制定され，学校教育法公布，六・三・三・四制による学校体系の改革がなされ，新制高校においては小学区制，男女共学，統合制の高校原則が適用された．

広島県世羅郡においては，昭和 24 年 4 月に広島県高等学校再編成により，大妻コタカが学んだ明治 30 年創設の世羅郡甲山町多田道子私立裁縫所は，世羅郡女子実業学校から世羅郡立世羅女学校，広島県世羅高等女学校，広島県立甲山高等女学校そして新制広島県甲山高等学校と変遷し，男女共学の広島県立世羅高等学校に統合され，女子校はなくなってしまった．

（3）昭和 26 年前後の高校進学と卒業後

学制改革で男女共学を推進したものの，女子の高校進学率は高くならず，文部科学省「学校基本調査」資料によると昭和 26 年度の女子の高等学校進学率は 39.6%，昭和 27 年度は 42.1%であったことを示している．

混乱の中でスタートをした戦後は，大勢の復員者と生産力の落ち込みのために雇用は圧倒的に供給過剰であった．そのため，昭和 26 年前後の男女を含む高等学校卒業者の 1/4 は無職で，就職者の 2 割が臨時雇いであったとされる．

際立った産業がない甲山町では，多くの者が中学校を卒業すると高等学校には進学せず「金の卵」として都会に出ていく構図であった．

都会に出してしまっては，農村に役立つ生きた教育が出来ない．甲山町の未来を担う人材育成が出来ないのである．

甲山町のような産業の脆弱な地域においては女子の教育が必要であった．そこで，女子の学校を設置するために，郷土の生んだ教育家である大妻コタカに学校創設の協力を得ることにしたのである．

甲山町立甲山高等技芸学校はこのような社会情勢下で昭和 27 年に創設した．

（4）大妻コタカへの協力依頼

昭和 26 年暮，甲山町の兼広清一町長は東京の大妻コタカを訪ね技芸学校創設の協力を依頼する．大妻コタカはこの年の 9 月に長い教職追放から解除されたばかりであった．

大妻コタカは分ではないと辞退をするが，兼広清一町長の燃えるような熱意に，学校長の職を引き受けることとした．

そして，大妻コタカは兼広清一町長と二人で甲山町内のあちこちを歩き，地元で各教科の権威者を訪ね，最初は無報酬で協力をしてくれる先生を探し学校創設を実現させた．

次いで，兼広清一町長は大妻コタカに何れ「大妻」の校名を頂く約束もし，校史の変遷で，昭和 35 年 10 月には甲山町立大妻女子専門学校と改称，昭和 40 年 5 月に学校組合立大妻女子専門学校と改称されている．

（5）学校運営

町立として創設したが公立中学校のような予算はなく，乏しい町財政の中から負担金を支出し，授業料は実費の半分から三分の一程度とし，極力安い学費で教育を受けられるようにした．

昭和 27 年度の授業料は 500 円，家事教材費月 100 円であった．

入学資格は本科：中学校卒業の者，研究科：高等学校または旧高等女学校卒業の者とした．

教科過程は，1 週間当たり洋裁（含手芸）16 時間，和裁 6 時間，茶道 2 時間，社会，国語，書道，音楽，珠算，随意科，各 1 時間と定めた．

校舎は町立中学校の 1 棟を間借りし，初年度である昭和 27 年度の入学者は，37 名であった．

昭和 27 年 6 月になり学校教育法第 83 条の規定により設置認可書が下付され，公認の各種学校の認可を得た．

教育方針は，農村地区の生活に即した家庭婦人としての資質向上，青年期に必要な学術技芸の修得，人間としての教養の向上と謙譲にして優雅な人間性の創造，技術の錬磨であった．大妻コタカの方針により，生徒の個性に応じた個人指導がなされた．

文化祭ではバザーや授業制作品発表が実施され，大正期に創設した東京の大妻学院が，創設時に実施し成功を収めた方式が多数取り入れられ，甲山町でも高い評価を受け，地域の話題となった．

（6）校長代理　磯崎睦（後の熊田睦）

大妻コタカは校長を引き受けるときに甲山町には常駐できない旨が了解され，校長代理として磯崎睦を派遣した．

磯崎睦は戦前に大妻技芸学校で洋裁を学んだ卒業生であり，戦後大妻技芸学校の助手を経て四国の松山の私立の高等学校に赴任していた．

技芸の腕もあり，学校経営の才能があるということで，当初は 1 年の約束で甲山町の学校の任に付いた．その後，磯崎睦は 18 年間その任に就いている．

四国から見知らぬ土地に赴任した磯崎睦は，創設から 2 年間は校舎内に住み，学校を守り学生を何とか満足できる教育内容を，設備を，と奔走した．

東京の大妻女子大学で壜細工講習があった時代には，磯崎睦は特注品だった壜細工用の壜を一つずつ自ら東京から運び，甲山町立甲山高等技芸学校でも壜細工講習を実施している．

磯崎睦の校舎内での生活は，板を張り巡らし，畳を敷いた職員室兼宿直室で，冬は寒く外で七輪に火を起こして炊事をしたという．

大妻コタカは「人のためにするのではなく，させていただくことに感謝している」と，甲山町に来たときは旅館に泊まらず磯崎睦と一緒に校舎内で何日も滞在している．

（7）独立校舎建設

昭和 27 年創設初年度の入学者は 37 名であったが，学校は家庭婦人として身に付けなければならない一般教育と技芸が身に付けられると評価は高まり，昭和 33 年度に入学者が 100 名を超えた．

昭和 31 年に政府が経済白書で「もはや戦後ではない」と宣言し，高度経済成長時代に突入する時代である．

学校は順調に発展し借物校舎では狭くなり，独立した校舎の建築に迫られた．

大妻コタカは，当時の総理大臣池田勇人をはじめ東京在住の広島県出身の大勢の人びとの愛郷心に訴え，建築資金の寄付の願いのために 3 か月間自ら戸別訪問し，協賛を得て，昭和 34 年 12 月に新校舎を落成させる．

新しい校舎が完成し，昭和 35 年 10 月に校名を甲山町立大妻女子専門学校と改称．さらに昭和 40 年 5 月には学校組合立大妻女子専門学校となる．教育設備も整い，高等学校卒業後の入学者，高等学校を卒業し社会に出た後の入学者も増加した．

（8）歴史に終止符

高度経済成長とともに高校進学率，大学進学率も高くなる．昭和 49 年には高校進学率が 90%を超え，大学受験も過熱した．

職業教育をする各種学校よりも大学進学を目指す普通科の高校に進学する女子生徒が多くなり，昭和 53 年春には本科の生徒募集を停止．昭和 56 年 3 月 31 日に廃校となった．

2.2.　聞き取り調査・展示・講演会の実施

甲山高等技芸学校は，昭和 56 年に閉校したため，文献や資料調査には限界があるため，卒業生を中心に聞き取り調査を行うオーラル・ヒストリーの手法を兼用した．

聞き取り調査は広島県世羅郡甲山町（現世羅町）の旧甲山町立甲山高等技芸学校同窓会（現大妻女子専門学校同窓会）の協力により推薦された 13 名から実施した．

あわせて新たな聞き取り調査対象者を発掘するために展示および講演会を行った．

2.2.1. 令和 5 年 7 月 10 日，11 日，世羅町大田庄歴史館（広島県世羅郡世羅町大字甲山 159）及び甲山自治センター（広島県世羅郡世羅町大字西上原 426-3）において聞き取り予備調査．

2.2.1.2. 令和 5 年 7 月 30 日，31 日，甲山自治センター（広島県世羅郡世羅町大字西上原 426-3）において，聞き取り調査および展示準備．

2.2.1.3. 令和 5 年 8 月 10 日～12 日，世羅町大田庄歴史館（広島県世羅郡世羅町大字甲山 159）において，聞き取り調査および展示準備，展示発表．

2.2.1.4. 令和 5 年 8 月 12 日～21 日（休館火曜日・水曜日），世羅町大田庄歴史館（広島県世羅郡世羅町大字甲山 159）において，第 23 回大田庄歴史館私の企画展「世羅のコタカチルドレン～大妻コタカふるさと世羅町での女子教育への貢献」展を，主催：一般財団法人大妻コタカ記念会，大妻女子大学，大妻女子専門学校同窓会（旧甲山町立甲山高等技芸学校），共催：世羅町教育委員会，後援：大妻コタカ先生顕彰会，世羅町，として実施．

2.2.1.5. 令和 5 年 8 月 18 日，世羅町大田庄歴史館 2 階学習室（広島県世羅郡世羅町大字甲山 159）において，大妻女子大学 井上俊也教授による講演「大妻コタカと福澤諭吉」を，主催：一般財団法人大妻コタカ記念会，大妻女子大学，大妻女子専門学校同窓会（旧甲山町立甲山高等技芸学校），共催：世羅町教育委員会，後援：大妻コタカ先生顕彰会，世羅町として開催．

2.2.1.6. 令和 5 年 8 月 18 日，19 日，世羅町大田庄歴史館（広島県世羅郡世羅町大字甲山 159）において，聞き取り調査および展示発表．

2.2.1.7. 令和 5 年 8 月 21 日，22 日，世羅町大田庄歴史館（広島県世羅郡世羅町大字甲山 159）において，聞き取り調査および展示発表，展示撤収実施．

2.2.1.8. 令和 5 年 11 月 10 日，甲山自治センター（広島県世羅郡世羅町大字西上原 426-3）において，聞き取り調査を実施．

３．まとめと今後の課題

まとめ

戦後の衣食もままならない時代に創設された甲山町立甲山高等技芸学校は，大妻コタカが大正時代に創設した伝習所時代から苦難して培ってきた学校経営の手腕が豊富に発揮され，大妻コタカの建学スピリットも濃密に組み込まれ振興した．

学校が発展できたのは，日本経済の高度経済成長期の波にも乗っただけではなく，大妻コタカの果たした役割が大きかった．

創設当初から昭和 30 年代までの入学者の多くは，その生活に戦争の影が投影されている．

生活を支えていた当主である父親の戦死，兄弟姉妹の被ばく死などの体験で，親に負担はかけられないと高校進学を断念し，何よりも安い授業料で，将来役に立つ裁縫技芸を身につけることのできる甲山高等技芸学校へ進学をしている．

安い授業料として学びやすくした点は，大妻コタカの学びたい人に何としても学ばせたいとする考えによる．

そのために，学校創設当初，各教科の権威者の中から無報酬で協力をしてくれる教員を大妻コタカ自ら集めている．東京に出て女子教育の草分けとして活躍した大妻コタカならではなせる業である．

創設直後に入学した者は，授業で使う教材は，新しい反物に鋏を入れることは少なく，古いものをといて，糊づけをして，縫い返したという．

中学卒業後本科に入学した者は，最初に取り掛かるのが，制服制作であったという．その生地も父親のコートをリメイクしての繰り回しであった．

入学して初めて運針を学ぶ生徒が，制服を仕立てていたのであるから，厳しい授業であったと推察される．

卒業生の A 氏は，中学卒業後甲山技芸学校で 3 年間学んだあと，校長代理の磯崎睦の勧めで，ひとり東京の仕立屋で修業し，8 年間の修業の後，プロの和裁士になったという．その腕前は，時の総理大臣婦人の着物を仕立てるほどであった．

厳しい修業に耐えられたのは，親身になって世話をしてくれた校長代理の磯崎先生の顔をつぶすことはできないと考えたからだという．また「恥を知れ」の校訓も心の支えであったとのことである．

昭和 30 年代後半になると経済的理由で高校進学が叶わない場合，昼間は甲山高等技芸学校で，夜は県立世羅高等学校の夜間部で学ぶというダブルスクール型で技芸も身に付け，高等学校卒業資格を得るケースもあった．

B 氏はダブルスクールで学んだあと，校長代理の磯崎睦の勧めで，地元紡績工場内の学校で裁縫を教えたという．

ダブルスクールで学んだ方の生徒には，さらに東京の大妻女子大学へ進学した方も複数あった．

昭和 27 年に甲山町に，安い授業料で学ぶことのできる甲山高等技芸学校がなかったら，多くの者は中学卒業後「金の卵」として地元を離れ，都市へ働きに出ていたであろう．あるいは，中学卒業後は農村地区の古いしきたりの中で，家庭生活を繰り返していたであろう．

甲山高等技芸学校に通うことで，東京の大妻女子大学と同様の最先端の裁縫教育であるテクニカルスキルを学ぶことが出来た．むしろ，専門学校ということで技芸技術は大妻女子大学よりもはるかに上であり，授業制作品の展示が新たな入学者につながった．

技術はお金で買えない尊い財産だったという卒業生は，地元で裁縫教室を，または縫製業を起業し自立した方もある．テクニカルスキルを習得することにより，人材が世羅から流出することなく，世羅町の産業振興に貢献したのである．

そして，この学校が教えたのは裁縫技芸というテクニカルスキルだけではない．大妻コタカはヒューマンスキルにも重点を置いていた．

卒業生 C 氏は，裁縫技芸を身に着けただけでなく，大妻コタカの精神的なヒューマンスキルを学ぶことが出来たことは人生において貴重な体験であったという．

大妻コタカの教えは，自分で考え自立すること，人の後ろばかりついていかないで自ら進んでいく，という精神である．

テクニカルスキルとヒューマンスキルをあわせてもつ卒業生は、地元に残り世羅町の発展に寄与している．地元婦人会などで様々な企画を立ち上げ実行している姿がある．

D 氏は，在学中，校舎新設のための一大事業に校長代理の磯崎睦が取り組まれ，東京と甲山で奔走する姿を見て，教育にかける情熱を感じたという．大妻の教育は永遠に生きる道であり，ここで学んだことが心の支えだとした．

戦後の厳しい時代に，裁縫技芸を学ぶことが産業と合致していた時代に，大妻コタカの建学の精

神を実現した学校が甲山町にあり，そこで学んだ「世羅町のコタカチルドレン」は，現在も地元社会で貢献している．この姿こそが，大妻コタカのふるさと世羅町での女子教育の貢献である．

今後の課題

このように戦後の復興期から高度経済成長期にかけて，際立った産業のない世羅町における甲山高等技芸学校（後の大妻女子専門学校）の果たした役割は大きい．

大妻コタカは明治 41 年に東京で私塾から始めた女子教育を，世羅町の地でも展開し，ほぼ半世紀を経て第二の建学を自らの故郷で実現したと言える．

しかしながら，高度経済成長，産業構造の変化にともなう高校進学率の高まりとともに学校は昭和 56 年に廃校となり，そのレガシーとも言える功績，そしてそれを支えた大妻コタカの教えというものは忘れ去られようとしている．

閉校からほぼ半世紀，かつての在校生，この学校を支えた世羅町の人びとに聞き取り調査を重ねオーラル・ヒストリーの手法を継続し，大妻コタカの建学の精神を継承する営みを続けることをする．

＜主な参考文献＞

『大妻学院八十年史』大妻学院（1989），『大妻コタカ先生追悼録』大妻学院（1970），『白鳩』学校組合立大妻女子専門学校（1981），『学制百年史』文部省（1972），『戦後日本経済史』日本経済新聞社（2022），『日本教育小史』山住正己（1978），『新訂教育の歴史』佐藤秀夫（2000），『げいびグラフ』青文社（2014）他